

辛亥革命と九州の華僑

辛亥革命和九州華僑

The 1911 Revolution and The Overseas Chinese in Kyūshū Japan

松 本 武 彦

Takehiko MATSUMOTO

Kyūshū 九州 especially Nagasaki 長崎 was the entrance for Chinese who came to Meizi 明治 Japan. For Chinese in Late Qing 清 period, Nagasaki was the entrance to a political free. Political activity by overseas Chinese in Nagasaki was weaker than economic activity.

Meanwhile overseas Chinese in Yokohama 横浜 and Kōbe 神戸 made political activity. In Nagasaki a lot of Chinese revolutionists, for example, Sun Yat-sen 孫逸仙 and Huang Hsing 黃興 worked and lived. Sun Yat-sen said that overseas Chinese in Kyūshū must be the bridge between Chinese and Japanese people.

Nagasaki is near China. So overseas Chinese in Nagasaki received strong influences from their mother country China.

はじめに

1912 (明治45) 年1月1日の夜、長崎の華僑たちが、中華民国の成立を祝っておこなったデモンストレーションのようすを、当時小学校五年生だった一女性は、その回想録⁽¹⁾に次のように記している。

新地の人たちが手に手に円いほうぎ提灯を持って、行列は新地から海岸の道、そして県庁の坂を上って来たのであろうか、何時もの行列通りを諏訪公園の広場へ向っていた。私は鐘の辻あたりの通りに立って見ていたと記憶するが、その行列に中国式の彩灯や飾物も有ったろうと思うが、楽隊に合わせて行進の人たちが大声で歌っていたその歌だけが今もはっきりと聞えてくる。その曲は当時流行していた米国建国の歌の曲をそのままに利用していた。(中略)まだ革命直後で革新の実も生活にまでは及ばなかったのであろう。弁髪を後に長く垂らしたり、頭に巻きつけている人々であった。

日露戦争中から幾度も見たこの通りをゆく提灯行列であったが、この夜の行列は人数は今までに見たのよりも少なかったが、革命建国の歡びにうちみちたその歌声のせいか、今も心にのこる意気高らかな灯の行列であった。

この事があったのはもう80年も前なのだが、長崎の一市民に、かくも明瞭に記憶されていたのは、もちろん、引用した文章にあるように、この提灯行列での華僑たちのいつになく意気軒昂なふるまいにもよろう。しかし、たとえば、かつて長崎では在留中国人のことを、心からなる親愛の情を込めて「アチャサン」とよんだような、また、今現在も福岡や熊本をはじめとし

て各地に唐人町という町名が残っているような、さらに、1989年夏、とりあえず高い賃金を求める老若男女を乗せて福建の港を出た、どう見ても決して大船に乗った気にはなれないような船が続々と到着するのが、沖縄を含む九州各県であるような、つまりは、九州と中国との間にある、日本の他の地域と中国との間には決して見られない、特徴的な関係の存在が、上掲の回想を可能にする背景として厳然とあることは、疑いのないところだろう。

今世紀のはじめ、中国は、ひとつの変動を経験した。清朝という異民族の専制王朝がたおれ、自由や民主・共和を標榜する中華民国なる国家が出現するという、一般に辛亥革命とよばれる変動である。もっとも、新しく出現したこの国では、決してその名にふさわしいような民主主義が社会の諸部面で貫徹されていたわけではなかったし、そもそも国家と呼ぶにあたいするような政治的統一が達成されていたかどうか、今となっては怪しいのである。変動の内実は、極めて短期間の出来事について仮に極言すれば、漢民族が満州人をその政治権力の場合から引きずり降ろしたにすぎない、ということになってしまいが如きものだった。つまり、ここで言う変動とは、まさに、清王朝が漢民族の商人や役人、学生や革命家などからなる一群の人々によって、打倒されたということなのだが、変動自体はもちろん、その変動が生み出されるにいたる過程も、中国自身のその後のあゆみはもとより、世界の国々、またそこに生活するさまざまな階層の人々に何らかの影響を与え、また逆に、それらの国家や人々からも多様な影響を受けた。

この、世界の多くの国々や地域で、さまざまな階層に属して生活する人々で、変動＝辛亥革命に影響を与え、また、影響を受けた者のなかには、一般に華僑とよばれる人々もいる。華僑、なかでも九州に居留する華僑達は、九州と中国とが、とりあえず冒頭に述べたような関係にある点において、他地域の華僑とは違った影響を辛亥革命に際して受け、また与えたことであろう。その実相に、おそらくは最初の研究上の一瞥をくれてみようというのが、この稿が草される所以である。

本稿は、まず、辛亥期したがって日本では明治末年の、九州の華僑の一般的状況を歴史的背景に留意しつつ確認し、しかるのち、華僑の側から見た革命運動の実体の追究と、革命運動の推移に即した華僑の活動の実体を追究することの、それら二つを同時におこなって、この問題の、まさしく実体を解明することとしたい。

1. 明治九州の華僑

日本において、華僑達が、華僑社会とよべるような、その集団をいわば永続的に保持して生活し始めた最初の土地は、とりもなおさず長崎である。もちろん、長崎以外の地たとえば博多などには、中世、多くの中国人がやって来ていたようであり、まぎれもなく中国人街と言い得るものが形成されていた時期もあるようだが、彼らの存在は、日本と中国との間の貿易の形態などに影響されて、転変のあげく、近世、いわゆる鎖国とともにその系譜は断絶し、近代の華僑社会へのつながりを発見することは、きわめて困難である。永続的とは、この意味でのことである。したがって、言わずもがなのことではあるが、華僑社会が形成された日本最初の地が長崎なのだから、九州最初の地もまた長崎ということになるわけで、かりに、九州華僑史を簡潔にではあってもふりかえるには、長崎華僑に目を向けねばならぬことは、これもまた多言を要しない。

長崎における華僑は、横浜や神戸の華僑と違い、鎖国時代前後からの長い歴史を背にしている。鎖国つまり日本の対外窓口が長崎一つになることによって、華僑は、長崎に集住するようになると同時に、長崎を除く九州各地やその他の若干の地では存在し得なくなった。鎖国によって、日本華僑はこれすなわち長崎華僑、ということになったのである。鎖国期、最初、華僑は長崎市街に日本人と雑居していたが、一七世紀後期には、いわゆる唐館に集住させられ始める。自由な外出は、許されなかった。もっともこの唐館のしくみができただけで、館外に居住する者もあり、たとえば唐通事は、それらの人たちなどが日本化したものである。幕府は、糸割符制の廃止、長崎会所の設立、正徳新例の施行など、鎖国のもとで何度か貿易制度を変遷させてそのコントロールを試みたが、一貫して貿易の中心となっていたのは唐船によるものであって、そこから生まれた利潤は長崎の市民にも還元された。しかし、たとえば唐館の人口は、中国からの船が長崎に入港した時には増え、これが出港してしまふと減るということを繰り返していた。このことからうかがえるように、唐館に形成された華僑社会なるものは、きわめて不安定なものであった、と言わざるをえない。

江戸幕府が鎖国を解消して、いわゆる開港がおこなわれると、長崎華僑は、鎖国時代からの歴史を背景とする唐館居住の中国人と、新たに設定された外国人居留地内の西欧人商人に付属するかたちで存在する中国人の、二種に分けられるようになった。またさらに、長崎への来住の形態という観点から、これに唐館居住の中国人の家族などで、外国船に便乗してあらたにやって来た中国人を加える見解もある。後に詳しく触れるが、興中会時代に横浜で孫文と深く関わりをもち、横浜興中会の会長となる馮鏡如は、幕末から明治初年にかけて、イギリス人商人に「付属」する者として長崎に居留していたことがある。ところで、おそらく馮鏡如もその一人だったのだろうが、中国人商人達は、幕末維新期の長崎貿易において、比較的豊富な資金と独自の流通ルートを持ち、たとえばグラバーなどといったいわゆる洋商にくらべ、非常な優位に立っていた。貿易だけでなく、明治初年には近村を行商する者も現れ始めた。ただし、彼らの長崎への定着度はあいかわらず低く、帰国と来日を頻りに繰り返していたようだ。

1873（明治6）年日清修好条規が両国によって批准され、長崎では、1878（明治11・光緒4）年より清国領事館が開設された。

鎖国下の中国人たちは、それぞれ出身地別に寺院を建立して集団を形成していたが、明治に入ってもそれは基本的には維持された。広東出身者は、江戸期には聖福寺をよりどころとしてまとまりを持っていたが、明治4（同治10）年広東会所が設けられる。三江幫は、長崎における最有力集団で、興福寺に結集した。福州幫は、明治になり三山公所を組織するが、江戸期には崇福寺を中心にまとまった。もともと唐館内にあった八閩会館を受け継ぎ明治に入って建立された福建会館は、泉漳幫の組織するもので、同じく江戸期には福濟寺に結集していた。広東会所や三山公所・福建会館は商人団体としての、いわゆる公所組織であるが、これらは長崎ではみな明治中期までには成立する。実体は、鎖国時代のいわゆる四福寺の幫別を踏襲したものだと言われる。

1905（明治38・光緒31）年、長崎時中学堂創立。また、中華商務総会は、1907年に設立される。横浜や神戸にも商務総会はつくられるが、長崎にまず最初におかれた。この二つの組織・団体は、いずれも清朝からの影響や支持のもとでつくられた。長崎の華僑社会について、他地域の華僑社会と比較して指摘できることのひとつは、華僑社会としての一体性を保持すべくとるさまざまな行動、あるいはまた、その行動をとること自体に一体性を必要とするようなそれ

には、時の中国の体制、つまりこの場合、清朝の影響が、きわめて色濃く影を落としていることである。

九州では現在でも特に福建省福清県出身者が多数を占めているのだが、福州幫は、明治中期以降、日本政府の労働移民排除政策のもとで、排除対象から除外された職種であった行商人として入国し、しだいに彼らの活動の場を長崎以外の地域にも広げていった。明治半ばを過ぎると、長崎港を舞台とする貿易は、他港の開港や長崎自体の産業・交通の発展の緩慢さから、衰退の一途をたどり始めた。これにともなって、華僑は、種々のチャンスを求めて他地域へ移って行ったに違いなく、開港によって端緒が開かれた長崎以外の地での華僑社会の形成が、ようやく本格化し始めるのである。しかし、これによって長崎・九州が華僑にとってまったく無縁な土地となったわけではない。中国大陸との近接性およびこれにしたがって設定された航路の存在によって、華僑達にとって明治後半の長崎は、たとえ日本における主要な活動の地ではなくなっても、依然として日本への入口ではあったのである。⁽²⁾

さて、辛亥革命当時、したがって日本では明治末年のころの九州華僑の状況は、具体的にはどのようなものだったか。各県の統計書類によれば、明治44年45（大正元）年の在留中国人は、長崎県が、明治44年男女計818人（男女比不明）、明治45年男564人女252人計816人。⁽³⁾福岡県、明治44年男113人女19人計132人、明治45年男121人女20人計141人。⁽⁴⁾熊本県、明治44年男50人女3人計53人、明治45年男49人女3人計52人。⁽⁵⁾鹿児島県、明治44年男19人女1人計20人、明治45年男24人女1人計25人。⁽⁶⁾佐賀県、明治44年男5人女0人計5人、明治45年男17人女0人計17人。⁽⁷⁾大分県、明治44年男8人女1人計9人、明治45年男6人女0人計6人。⁽⁸⁾宮崎・沖縄両県は、統計書に記載がない。また、職業構成については、明治45年の長崎と大分が数値を載せているが、このうち大分は、すべて「商業」⁽⁹⁾。一方長崎は、有職者769人のうち、20%あまりの170人が貿易商でいちばん多く、以下雑貨商88人、呉服反物商（行商を含む）52人、飲食店50人、裁縫業49人、商店員42人等となっている。長崎における外国人貿易商の総数が173人であるから、この時期に長崎に居留した外国人貿易商は、そのほとんどが中国人であったわけで、いかに華僑貿易商の存在が突出したものであったかがわかる。⁽¹⁰⁾他の明治後期の数年もほぼ同様であり、長崎では、貿易商といえば華僑という状況が生まれていた、と言ってよかろう。以上の明治末年の状況と、統計数値が得られるかぎりの明治期の華僑人口の推移を通覧すると、九州の華僑は、明治30年代においても流動的な存在であり、人口の面で安定的になるのは40年代に入ってから⁽¹¹⁾のようである。

さて、明治後期の九州の華僑は、人口の面では、日本華僑の1割前後を占め、九州在留の他の外国人が減少傾向にあるにもかかわらず、毎年若干の増加をみていた。ただし、長崎華僑は、これもまた若干ではあるが、毎年減少しているから、九州全体のこの増加は、長崎以外の九州各県への華僑の進出ぶりを示すものであり、九州華僑のひろがりの一端を明示するものと理解し得よう。これに対し、明治45年の神戸華僑（在留中国人）は1831人、横浜華僑は4009人。明治45年の横浜では「被雇人」801人が最も多く、続いて裁縫業226人、銀行員112人、ペンキ塗85人、活版印刷業81人などとなっている。貿易商は43人で、有職者全体の3%たらずである。⁽¹²⁾同様に明治45年の神戸をみると「商館員」225人、貿易商180人、「労働雑役」99人、ペンキ塗89人等の順になっている。貿易商180人は有職者の17%あまり。⁽¹³⁾神戸華僑の人口は微減しつつあったが、横浜は日清戦争以後着実な増加を示しこの年初めて4千人台に突入したのだった。⁽¹⁴⁾明治最後の年であり新しい大正の最初の年には、もうすでに、長崎華僑社会は少なくとも人口

の面で、神戸や横浜の後塵をはいするようになっていた。

2. 革命運動における長崎華僑

イ. 「入口」としての長崎

たとえばここに、馮鏡如という人物がいる。普通、彼は、横浜興中会の会長であり横浜における孫文の後援者として、中国近代史なかんずく辛亥革命史には登場する。しかし、彼にとっての日本は、実は、すでに述べたように、横浜が最初ではない。

辛亥革命史に登場する馮鏡如は、次の如き人物として記憶されている。すなわち、かれは横浜で文経印刷店なる店を経営し、日頃から清朝の政治に不満を持っていた。元々は清朝を創建した中国北辺の少数民族満州族の風俗であり、したがって中国人＝漢人のものではないがしかし当時はもう中国人にとってあたりまえの髪型となっていた弁髪を切り落とし、皆から「無弁仔」とあだなされていた。そして、ハワイで興中会を組織した後香港へ向かう船中にあった孫文に、その船がちょうど横浜港に入港中、接触をはかった。それが、1895年の初頭。結局、この時は孫文と直接顔を合わせることはなかったが、そのチャンスはすぐにやってくる。同年11月、広州で準備していた蜂起計画が露見して、孫文は日本に避難。まず訪ねたのが文経印刷店だった。こうして横浜にも興中会の分会ができ、馮鏡如が会長となるが、会の活動は決して順調であったわけではなかった⁽¹⁷⁾。

さて、馮鏡如の息子馮自由の記すところによれば、孫文が訪ねてきた時すなわち1895年11月、文経印刷店は、外国文具の販売および印刷をおこなう老舗として横浜の山下町53番にあって、すでに30年を越える歴史を持つ華僑の間で有名な店になっていたという⁽¹⁸⁾。これにしたがえば、馮の文経印刷店は1865年頃の創業ということになるのだが、いったいこの30年というのは、横浜でのことだろうか。つまり文経印刷店は、1865年頃横浜で創業したのだろうか。そうではないのである。長崎県立長崎図書館史料課が所蔵する、慶応2（1866）年正月から十二月にかけての『外国人并支那人名前取調帳』には、正月から十二月まで一貫して、「英ゴロウル附属馮鏡如」として彼の名が妻楊氏とともにみえる⁽¹⁹⁾。また、『明治二年己巳從正月至十二月 外国人支那人名前調帳』正月の条にも「大浦貳拾壱番 英ゴロウル附属 馮鏡如」とあり、下って明治11年の清国人登録簿にも「上等 馮鏡如 五十六歳 番禺県 文墨字画師 二年二月三日 十七番 一月廿八日」とある⁽²⁰⁾。この「二年二月三日」は来日した年月日で、「二年」は明治2年のことを指すものと思われるが、上述の通り慶応2年には既に長崎に1年間にわたって居住しているから、本人の申告によるものか係官の誤記によるものかはいざ知らず、明らかに誤りである。「十七番」は、居住した居留地内の地番。最後の「一月廿八日」とは、この登録をおこなった明治11年の1月28日。実は、文久元（1861）年にも、馮が長崎に所在していた形跡があり、以上を要するに、1860年代初めから70年代後半にかけて、馮鏡如は長崎に居留しているのである。では、長崎滞在中の彼の生活面はいかなるものだったか。長崎市立博物館には、彼の筆になる掛軸が収蔵されている。同館の主任学芸員原田博二氏によれば、馮鏡如のものは、長崎ではあちこちでみられるのだという。長崎の彼は、まさしく上掲記載の通り「文墨字画師」であったようだ。19世紀も末の1895年前後に、革命運動を開始したばかりの孫文の後援者として辛亥革命史に登場する横浜華僑馮鏡如は、そのおよそ30年前には、実に長崎の華僑であって、維新直後の当地に、イギリス人商人に随伴する者として在留していた。30年のうちに、居所は

長崎から横浜へ移り、立場はイギリス人の随伴者から、老舗印刷所の主人であり新しい政治運動の理解者・活動家へと変貌していた。彼にとって長崎は、日本への入口であったことはもちろんだが、清朝治下の本国にあってはなされにくかったであろうと思われる、彼の政治に対する意見と行動の自由な涵養に、一定のきっかけを与えるものだった。つまり、長崎は、この意味での、馮鏡如の政治生活のまさしく入口であった。

以上のような意味での、いわば長崎＝「入口」論の適用を受けるのは、ひとり馮鏡如に限らない。清末、中国から日本へ多くの留学生が渡った。来日ラッシュは、日露戦争の前後にピークに達する。彼らは日本で、科挙向きではないが実学的な、新しい学問・技術を身につけて、一部は、革命家・革命的知識人層を形成して中国同盟会などの革命団体の中核となってゆく⁽²²⁾。このいわゆる留日学生にとっても、やはり長崎は「入口」だったのである。留学生たちは、日本に来る前に、受け入れ先がはっきり決まっている者ばかりでは決してなかった。留学先はもちろん、やって来たその日に宿泊する場所が決まっていなかった者もあるいはいたかもしれない。しかし、異国で行くあてのない不安を解消する主要な方法は、今も昔も同じ。すでに日本に来ている先輩たちを頼るのである。清末の中国人留学生は、東京の神田駿河台に清国留学生会館を組織したほかいくつかの出身省別同郷団体をつくって、このことを、いわばシステム化している。その「清国留学生会館招待規則」には、船で日本に着いた時に、どこの誰に連絡したら良いかが明記されている。それによると、天津航路・上海航路いずれで来日する者も、まず長崎に乗船が着いた時点で、留学生会館または会館の賛助者のところに、電報を打って会館への到着日時を知らせろ、とある。同様のことは、たとえば、日本における湖南省出身者の親睦団体であった、湖南懇親会の規約である「湖南懇親会草章」にもみえて⁽²⁴⁾いる。清末の中国人留学生が、自覚的に、あるいはそうでなくとも結果的にみて、革命への道を歩むために渡って来たことになる日本で、最初におこなう仕事は、わが長崎で、多くの先行者が待つ東京にむけて、おおげさに言えば、日本の天地にみずから立ち現れたことを告知して、出迎えを求めるための電報を打つことだったのである。彼らにとっても、長崎は、思考と行動の自由への、入口だった。

ロ．長崎華僑の革命運動

長崎華僑が革命運動といかなる関係を有したか、あるいは、実際にいかなる革命運動をおこなったかを検討する前に、まず、一般的な政治問題に対し彼らがとった対応について、みておくことにしよう。

それをするのに適切な例は、とりあえずは、1908年2月に発生し、ほぼ同年いっぱい継続した、第二辰丸事件に端を発する対日ボイコット運動への長崎華僑の対応である。この第二辰丸事件に端を発する対日ボイコット運動とは、武器密輸容疑で中国官憲に拿捕された日本船第二辰丸を、日本側が強引に奪回し、これに抗議するため主として広東・香港の有力者や商人が日本製品のボイコット運動をおこなったものである⁽²⁵⁾。運動がおこった当初、長崎の華僑は、横浜・神戸の華僑と同じように、ボイコット運動に反対している。そして、4月下旬に東京で行われたボイコット運動に反対する決議を、横浜華僑とともに支持した⁽²⁶⁾。日中貿易に依存していた華僑、なかでも貿易商にとっては、日本製品排斥運動に加担するわけにはいかない。それをすれば、自らの存立基盤を失うことになる。実際、長崎華僑は、このボイコット運動がおこる前年の1907年には金額にして241万円以上を輸出しており、この数字は、長崎から輸出された商品

の価額について、日本人をも含めた荷主の国籍別に見た場合、第1位を占めるものであった。ところがボイコット運動が行われた1908年には、約149万円と額の上で減ったのはもちろんのこと、第1位の座も日本人に譲った。そして翌年になると、173万4千円余りで約162万円の日本人をおさえてふたたび第1位に復帰しているのである。このような推移は、きわめて明瞭に、長崎華僑がこのボイコット運動から、おおきな経済的打撃を受けたことを示している。⁽²⁸⁾こうした状況のもと、長崎の華僑は、金融面で緊密な関係にあった上海方面へ日本商品を送り、それを中国産品と混交することで日本産品であることをカモフラージュして、最終的には広東へ回送した。上海は、長崎華僑との金融関係の密接さ故に、具体的に言えば、長崎華僑がボイコット運動から打撃を受けて資金が回収不能となることを警戒したため、広東・香港の運動に同調しなかったのである。⁽²⁹⁾北京・天津一帯は義和団の活動の影響・打撃を受けたが、これが及ばなかった上海の金融業は、今世紀初頭、新たな発展期を迎えていた。当時上海には、中国通商銀行や、信成商業儲蓄銀行・浙江興業銀行など完全な民間銀行も出現しており、また外国銀行は錢庄への融資を大幅に増やすなど、上海の金融は活発におこなわれていた。⁽³⁰⁾10月下旬には、神戸・横浜の華僑と共同して、香港に海産物約15万円ぶんを送ったが、かえって運動の高揚をみる結果となってしまった。⁽³¹⁾

結局このボイコット運動は、1908年の末頃までに終息したが、長崎華僑は一貫して、単なる経済活動としての日本産品の輸出活動に従事し、また、それを阻害する要因の除去あるいは回避に知恵をしぼっており、彼らのふるまいが、結果的にボイコット運動に反対すること、あるいはボイコット破りにあたることになったとしても、そのような姿勢・行動は変わらなかった。反ボイコット運動の立場をとった横浜華僑、ボイコット運動に賛成し推進した神戸華僑とは、政治的運動への対応の仕方におおきな違いがあった、と言うべきであろう。

当時、日本には、東京の中国同盟会を機関とする革命派と、神戸に滞在する梁啓超を中心とする保皇派の勢力が存在しており、両者がそれぞれ日本華僑にも影響力を行使した。日本在留華僑は、それらを含めた諸要因に引きづられ、日本華僑としての統一かつ主体的行動をとることはできなかつた。⁽³²⁾

辛亥の歳、1911年10月、武昌で革命の火蓋が切られると、日本華僑は、神戸華僑の提議により、中華民国僑商統一連合会（以下、統一連合会と略記）という、革命を支持する日本華僑の統一組織をつくった。長崎華僑は、会の結成のよびかけを11月25日頃神戸から受け、さらに、神戸華僑との慎重な情報の交換の後、12月9日になって、長崎における統一連合会の会長として蘇道生（原〔源〕昌號）、⁽³⁴⁾副会長として梁肇三（和昌號）・簡心茹（裕益號）のふたりを決定して、会を発足させた。⁽³⁵⁾会長の蘇は、留日学生の雑誌『江蘇』に江蘇同郷会名誉会員としてその名前がみえ、20円の寄付も行っており、おそらく三江幫に所属する江蘇省出身者であろう。⁽³⁶⁾本業は、木綿を扱う貿易商だった。⁽³⁷⁾また、副会長の梁肇三・簡心茹も、ともに、新地に店を構え、海産物を扱う貿易商であった。⁽³⁸⁾梁肇三は、福建出身だった。⁽³⁹⁾さらに、12月16日に統一連合会の会議が西浜町の精洋亭で開かれたが、これには、長崎駐在領事が出席して、中国における帝政の適と共和制の不適を説き、領事館にひるがえる黄龍旗への十分な敬意の表明を、出席した華僑を通じて長崎在留華僑全体に求めた。華僑たちは、清朝旗への表敬は約束したが、領事の説く政体問題には黙して語らなかつた。⁽⁴⁰⁾もともと長崎における統一連合会は、清朝の「商会簡明章程」に従って1907年に成立した、長崎商務総会の組織を下敷きにして出来あがっていた。⁽⁴¹⁾会長の蘇道生も、実は、革命勃発時、長崎商務総会の会長だったのである。であるからこそ、

本来、統一連合会は清朝の支配に反対し革命を支持する組織なのだが、長崎では、その会合に領事が出席するということが起こり得たわけである。

長崎の華僑にとって、統一連合会という組織は、あくまでも長崎の外から持ち込まれたものであって、その意味では商務總會と同じ性格を持つと言って良く、革命支持という立場での会の活動においては、主体性も希薄になりがちであった。⁽⁴²⁾

もちろん、革命への支持の姿勢を、より直接的かつ劇的に表明した長崎華僑もいた。それは、本国で戦われている革命戦争への帰国参加というかたちでなされた。横浜・神戸では11月下旬頃から兵員として帰国する者の組織化が進められ始め、まず、12月11日に横浜・神戸あわせて90名ほどが長崎に入港し、長崎の統一連合会会長蘇道生による出迎えを受け、長崎からはこれに少なくとも6名の参加者があり、同日上海へ向け出港した。⁽⁴⁴⁾長崎からはその後も、おそらく2名ほどの帰国者があり、それらをあわせると約10名が兵員として帰国したと考えられる。⁽⁴⁵⁾長崎からの参加者の実数は僅かであるが、前述した総人口との比率からすれば、最も多い約60名の参加者があった横浜と比べ、ほとんど遜色ない。⁽⁴⁶⁾

横浜から約60名、神戸から約40名、そして長崎から約10名のあわせて約110名が、上海軍政府の求めに応じて兵員として帰国したのである。⁽⁴⁷⁾⁽⁴⁸⁾

1912年1月1日、孫文を臨時大總統に、南京に、中華民国臨時政府が発足した。長崎の華僑たちは、本稿の冒頭で紹介したように、新国家の成立に対し、意気高らかに祝意を表明した。1月15日、革命の実況映画が上映され、新国家へ向けての資金の募集が行われた。この募金活動は、具体的には紅十字会のためのもので、前出の、長崎における統一連合会によって組織された。⁽⁴⁹⁾長崎での募金は、前年の11年の段階で、既に、4千円の資金が集まっていた。⁽⁵⁰⁾

2月1日には、孫文の息子孫科が、アメリカから上海へ向かう途中、横浜などを経たのちに立ち寄った。⁽⁵¹⁾

2月上旬長崎県庁を領事がたずね、領事館で新国旗を掲揚することを伝えたが、県当局は、日本政府がまだ中華民国を承認していないことをもって、領事を在留華僑（中国人）の代表とは認められないとし、結局、国旗の掲揚はみおくられた。⁽⁵²⁾また、皇帝が退位したことを祝い祝賀会も、2月中は挙行されなかった。挙行をうながす神戸華僑の呼びかけに対し、長崎華僑は、各国によって中華民国が承認された後におこなうことを返信した。⁽⁵³⁾

この間、日中間の貿易は、ほとんど途絶状態と言って良い状況に陥り、中小の貿易商はまったく不振となり、特に華僑貿易商の取引からの後退・脱落がすすみ、その一方で、日本人商人の躍進が顕著となった。⁽⁵⁴⁾ただし、華北との貿易は、3月中には回復の兆しを見せたようである。⁽⁵⁵⁾

中国の新しい出発に対し、長崎華僑を含む日本華僑は、彼らの民族意識を高揚させ、また、その高揚を通じて、中華民国僑商統一連合会の結成というかたちで、日本華僑としての一体性を生み出した。⁽⁵⁶⁾

3. 革命党人と九州

イ. 九州来住の革命党人

「入口」としての長崎をかかえる九州には、ただ単に、ここを鉄道や船で通過するだけでなく、何らかの目的を持ってやって来た多くの革命派人士がいた。たとえば、孫文・黄興・戴天仇・柏文蔚・李烈鈞・譚人鳳・蔡鍔等々。これらの人々のなかには、第二革命以後であるが、

九州に生活の拠点を置いて活動し、いわば華僑的存在となった者もあった。それらのことも含めた、革命派中国人の往来の一端を、外務省記録なかでも九州から発信された外務省への報告電報等⁽⁵⁷⁾で追ってみよう。

それらの電文のなかに、たとえば、孫文をはじめとして多くの革命派の人々が利用した長崎の旅館としてしばしば登場するのが、当時の大村町の福島屋と今町のみどりや、である。いずれも、現在の位置関係から言えば、長崎最大の繁華街浜町から、フェリーの発着する大波止の間に広がる一帯に所在している。福島屋には孫文が内田良平らとともに、黄興が宮崎滔天と、⁽⁵⁸⁾ ⁽⁵⁹⁾ その他、柏文蔚⁽⁶⁰⁾・蔣介石⁽⁶¹⁾・胡瑛⁽⁶²⁾らが、また、みどりやでは、戴天仇⁽⁶³⁾・殷汝耕⁽⁶⁴⁾などが旅装を解いている。かつては、今の長崎新地中華街にほど近い広馬場⁽⁶⁵⁾にあり、現在はグラバー園にほぼ隣接する松ガ枝町の四海楼も、食事や休憩・宿泊に使われた。

第二革命勃発後、1913（大正2）年9月頃から1916（大正5）年頃にかけて、福岡県太宰府には譚人鳳⁽⁶⁶⁾が、長崎市南山手には柏文蔚⁽⁶⁷⁾、同東山手に李烈鈞⁽⁶⁸⁾が居住していた。柏は1200坪の土地を5年契約で借り、養鶏や野菜栽培を行って⁽⁶⁹⁾長期の亡命生活に備えた。大正3年1月に外務省が作成した亡命者名簿⁽⁷⁰⁾には、孫文・黄興をはじめとして総数46名がリストアップされており、このうち7名が九州・山口（下関）に所在した。この7名以外は、旅行中や帰国中の者を除けば、すべて東京居住者である。さらに、同年4月の調査⁽⁷¹⁾では、長崎在住者だけで21名に達した。九州なかでも長崎は、東の東京とならんで、亡命中国人が集住する西の中心となっていたわけである。

1909（明治42）年1月に黄興が、1914（大正3）年1月には柏文蔚が鹿児島を訪れ、ともに西郷隆盛ゆかりの地に足跡を残した⁽⁷²⁾。彼らにとって西郷は、特別な意味を持つ日本人だったようである。この時の黄興の九州行は、宮崎滔天と行を共にしたもので、このあと熊本へ向かい、市内洗馬町の旅館研屋に投宿し、水前寺に遊び、滔天の故郷荒尾をも訪れている⁽⁷⁴⁾。その荒尾には、1897（明治30）年11月、数ヵ月前に出会ったばかりの滔天と孫文が、さらに1913（大正2）年3月には、袁世凱に譲位した後朝野の歓迎を受けて来日した孫文が、やはり滔天とともに訪れている⁽⁷⁵⁾。この他、大分県別府の日名子旅館（現在は廃業）に張継⁽⁷⁶⁾が滞在し、福岡の九州帝大の大学病院には蔡鍔⁽⁷⁷⁾が入院している。彼はそこで終焉を迎えた⁽⁷⁸⁾。

ロ. 孫文と九州の華僑

以上見てきたように、多様かつ多数のそして著名な革命派人士が九州を往来し、また、活動を行ったが、彼らと九州の華僑は、具体的にはどのような関係にあったのだろうか。このことを知るために、まず、第二革命勃発直前の1913（大正2）年、東京・神戸等各地を視察しその間日本政府要人や財界人との会談をこなし、3月16日（日曜日）門司に上陸してから、宋教仁被殺の報に接して23日あわただしく長崎を上海に向けて発つまでの、九州各地での孫文の行程にみられる、華僑達の対応ぶりをふりかえってみよう。

3月16日朝8時過ぎ、関門海峡を渡り門司に上陸した孫文は、路面電車で小倉方面へ向かい、安川敬一郎の出迎えを受けて明治専門学校（現九州工業大学）を訪問し学生等を前に演説。この日は学校近くの安川邸に宿泊した⁽⁷⁹⁾。

3月17日、八幡製鉄所を視察。同所で昼食後、列車にて博多へ。夜、安川ほか7名の筑豊の「鉱業家」と晩餐をとともにした⁽⁸⁰⁾。

3月18日は終日博多。宿舎の常盤館を発って聖福寺で平岡浩太郎を展墓。平岡良助邸、中野

徳次郎邸、玄洋社を訪問。午後、常盤館で安川・平岡・中野等と「旧友会」。15時過ぎ安永東之助を展墓の後、九州帝国大学医科大学（現九州大学医学部）を視察・講演。18時、福岡県知事出席のもと行われた中洲の公会堂での歓迎会で、一般人を含む200余人を前に演説。⁽⁸¹⁾

3月19日、8時過ぎ列車で博多駅を発し、11時頃大牟田駅着。三池炭鉱事務長・大牟田市長出迎え。四ツ山発電所、三池築港を視察し、三井港倶楽部で昼食。13時過ぎ馬車で熊本県荒尾の宮崎滔天生家へ向け出発。村境に荒尾尋常小学校児童約300名が待ち受け、歓迎。滔天生家で村長ら出迎え。1時間ほどの滞在の後、ふたたび大牟田の三井倶楽部へ。途中、万田敏・三井工業学校などを視察。同夜は、三井倶楽部で晩餐会の後、同所宿泊。⁽⁸²⁾

3月20日、大牟田駅より列車で熊本駅着。熊本城より市街展望。昼、静養軒で五高への中国人留学生による歓迎の午餐会。済済齋を視察し生徒に演説。校長より刀を贈られる。17時、物産館での歓迎会に臨む。一般人を含む来会者350名余。20時、一日（本）店での特別歓迎会で、東亜同志会からも刀。⁽⁸³⁾

3月21日朝、熊本県知事等100余名の見送りを受け、列車で長崎に向け熊本駅を発つ。途中の早岐駅で佐世保市長が出迎え同乗。諫早駅で長崎県知事同じく同乗。18時過ぎ、長崎駅着。長崎市長・駐在領事等出迎え。いったん旅館福島屋に入る。領事館で晩餐会。これには、長崎華僑の源昌號・泰益號ほか26名が出席した。⁽⁸⁴⁾

3月22日、終日長崎。青年会館で「世界の平和と基督教」と題し講演。来会者は500余名で、その中には長崎駐在アメリカ領事もいた。昼、福建会館で華僑等70余名と午餐会。そのあと鈴木天眼宅を訪問。16時、小島鳳鳴館で一般人を含む約200名来会の歓迎会。精養（洋）亭で長崎医専在籍中国人留学生による晩餐会。これには、前出の蘇道生（源昌號）や領事などが同席。21時30分、散会。⁽⁸⁵⁾

3月23日、10時過ぎ大波止より三菱造船所へ。昼、造船所内の占勝閣で午餐。ふたたび市内にもどり、15時30分より、市街を人力車20数台連ねてパレード。16時過ぎ、ランチで港内の天洋丸に着く。華僑等見送り。17時、天洋丸抜錨。音楽隊を乗せた見送りのランチは、港外まで伴走した。⁽⁸⁶⁾

以上によれば、留学生をも含む在留中国人が孫文と接触したのは、熊本と長崎である。熊本での五高などに来ていた留学生との午餐会。長崎の領事館での華僑との晩餐会。おなじく華僑との福建会館での午餐会。そして一部の華僑も出席した長崎医専留学生との晩餐会である。熊本での留学生による午餐の会には、五高への留学生10名、医専1名、熊本商業1名等が出席し、五高の王兆栄が歓迎の挨拶をし、孫文はこれに応じて、学生たちの勉学の結果に期待する旨話した。さらに、長崎での留学生による歓迎の晩餐会は長崎医専への留学生28名によるもので、既述の如く、領事と蘇道生も同席している。留学生陶鑄による開会の挨拶の後、孫文は演説して、自分もかつて医学を学んだ者の一人であること、「医術も亦国家行政の一部にして単に技術のみに止まらぬのだからおおいに勉学に励んでほしいこと、「健全なる思想の国民を造らんには衛生思想の普及を図ら」ねばならぬことなどを説いた。⁽⁸⁸⁾長崎の留学生達は、辛亥革命の勃発に際して革命に投ずるため帰国し、民国の成立後、一部の者は相語らって復学している。⁽⁸⁹⁾この会に同席した蘇道生は、留学生達の後援者でもあった。ちなみに九州・長崎関係の留学生では、この他、たとえば長崎高商卒業者に、1923年国民党大連支部長に発令された孫天孫がいる。⁽⁹¹⁾領事館での晩餐会には、蘇道生（源昌號）のほか萬昌和、泰益號などが出席した。⁽⁹²⁾萬昌和は主人潘達初、新地に店を構える広東出身貿易商人。⁽⁹³⁾泰益號主人陳世望、同じく新地に店を構

⁽⁹⁵⁾え、福建省金門島出身の貿易商⁽⁹⁶⁾だった。福建会館での午餐会は、専ら長崎華僑との交歓の場となった。熊本や博多でも、このような機会はなかったから、極めて貴重なものと言える。領事館で孫文は、中国と日本の友好を説き、国土が狭いのに人口の多い日本は工業を発達させ、広大な国土に比し人口の多くない中国は農業によって国土の開発をおこなって、日中の「国際的
同盟、人種的締盟は将来益々必至に迫られ居れるが故に各在留民諸氏も又其積りにて益々親密
を図り東洋平和の為め將た両国の利益の為に大に努力を希望す⁽⁹⁷⁾」と述べた。「同盟」し「締
盟」する日中の架け橋として、華僑は位置づけられたのである。孫文によって、長崎でなされ
たこのような華僑の位置づけ・評価は、東京や横浜・神戸での華僑に対する演説との比較の上
では、どのように理解することができるだろうか。1913年2月から3月にかけての来日時、孫
文が日本在留の中国人に対しておこなった講演・演説は、もちろんこれら以外にもおこなわれ
た可能性は否定できないが、内容が明確になっているものを挙げれば、長崎以外では、東京で
1回、横浜で1回、神戸で2回である。このうち東京でのものは、3月1日に在京の国民党支
部・共和党支部・広東同郷会の3団体が開いた歓迎会でのもの。横浜でのものは3月6日に横
浜の国民党支部でおこなわれたもの。さらに神戸の1回も神戸の国民党交通部の歓迎会でなさ
れたものである。これらはどれも国民党関係者になされた演説であり、いわば身内に対するも
のである。したがって、純粹に華僑一般に対し、孫文が講演なり演説なりで自己の抱負や所感
を語り訴えかけたのは、3月13日に神戸の中華会館でおこなわれたものと、長崎の領事館・福
建会館でのそれしかない⁽⁹⁸⁾のである。3月13日、神戸の神阪中華会館で孫文は、以下の如く神戸
華僑に訴えた。すなわち、確かに中華民國の成立はめでたいことだが、新国家は生まれたばかり
の子供と同じでこれからまだまだ困難なことがたくさんある。共和制のもとでは国民ひとり
ひとりに責任があり、国家と国民は一体である。国民は「愛身愛家」の精神で、華僑が異郷で
苦闘しているのと同じように、国を愛さねばならない。華僑（「同胞」）はこれに力を貸して
ほしい、と。ここに現れた華僑評価では、新しく成立した共和国への理解者・協力者・賛助者
として華僑が位置づけられており、日中関係への言及がまったくない点で、長崎の領事館での
演説と好対照を成している。

宋教仁が暗殺され、あわただしく帰国した孫文は、結局第二革命に敗れ、同じ13年8月日本
へ亡命したが、翌年秋には東京で中華革命党を組織し、反袁の革命活動を継続していった。そ
して、1915年2月に、中華革命党の神戸大阪支部が組織され、11年から12年にかけて中華民
国僑商統一連合会会長をつとめた、神戸華僑で福建省金門島出身の貿易商王敬祥⁽¹⁰⁰⁾が支部長となり、
同10月から12月にかけて横浜支部も、横浜華僑などの参加を得て組織化された。ところで、時
期的にみて神戸・横浜両地での組織化のちょうど中間、15年7月に党務部長居正の提議により、
孫文の承認を得て⁽¹⁰¹⁾、彭養光なる人物が長崎に連絡員として置かれている⁽¹⁰²⁾。この彭養光が如何な
る人物なのか、現在のところ詳らかでない。いずれにしても、長崎の持つ「入口」性が孫文を
はじめ革命党人に明確に意識されていたことの証と考えられるが、一方で、神戸や横浜のよう
な支部組織が長崎にはつくられていないことをみると、この時期の長崎華僑は、積極的な革命
活動への関与をおこなわなくなっていたと判断せざるを得ない。また、孫文は、後に三民主義
としてまとめられる、1924年1月から広州でおこなわれた連続講演のうち、2月3日になされ
た民族主義に関する2回目の講演のなかで、外国の海運会社が中国航路を支配しているために、
中国産品の国際競争力が低下してしまふ現実を訴え、あわせて横浜とともに長崎⁽¹⁰³⁾の存在を、国
際的流通ネットワーク中の東アジアにおける重要な一拠点として挙げているのである。

おわりに

清末、日本へやって来る中国人——それが留学生であろうと華僑であろうと——にとって九州特に長崎は、地理的な意味での日本への入口であったことはもちろんだが、同時に、清朝の支配下にある本国ではなされにくいような彼らの政治に対する意見と行動が自由に養われるにあたり、きわめて積極的な役割を果たしていた。

長崎における華僑の政治的活動は、たとえば、ほぼ1908年いっぱい継続した第二辰丸事件に端を発する対日ボイコット運動への対応についてみれば、彼らは一貫して、単なる経済活動としての日本産品の輸出活動に従事し、また、それを阻害する要因の除去あるいは回避にいっしょうけんめいで、結果としてボイコット運動に反対することになっても、それは継続・実行された。反ボイコット運動の立場をとった横浜華僑、ボイコット運動に賛成し推進した神戸華僑の例からみれば、その対応が示すものの属性として、非政治性を指摘し得ることは明瞭である。

1911年10月、武昌で革命の火蓋が切られると、多くの日本華僑が、統一連合会という、革命を支持する統一組織に結集した。長崎華僑は、この会の中心となった神戸華僑との慎重なやりとりの末、長崎における統一連合会の会長として江蘇省出身で木綿を扱う貿易商の蘇道生、副会長としてともに海産物を扱う貿易商の梁肇三・簡心茹のふたりを決定した。会長の蘇道生は長崎商務総会の会長で、会はその組織をそのまま引き継いで成立した。統一連合会は、実は商務総会同様、長崎華僑にとって長崎の外から移入されたものであって、革命支持という立場での会の活動においては、彼らの主体性は希薄であった。もちろん、帰国して革命戦争へ参加することによって、革命支持の立場を明確にあらわした長崎華僑もいた。彼らは、横浜や神戸の同様の行動をとる者達とともに、12月中旬出発した。

長崎には、孫文をはじめとして黄興・戴天仇・柏文蔚・譚人鳳・李烈鈞・胡瑛・殷汝耕・蔣介石などが滞在・生活し活動した。特に第二革命後は亡命中国人が増加し、九州なかでも長崎が、東の東京に対する西の中心となっていた。このほか、福岡・熊本・鹿児島・荒尾・別府・太宰府などにも革命派中国人の足跡がしるされている。

孫文は、他地域の華僑に対しては、日中関係への言及をまったくせずただ新共和国への協力者・賛助者としていわば援助・支援を訴えたのに対し、その演説からうかがえるように、九州の華僑には、日中間の友好関係を維持しまた発展させる触媒の役割を期待していた。

第二革命に敗れたの中華革命党時期には、長崎に党員の連絡員がおかれたが、神戸や横浜のように支部組織はつくられておらず、長崎華僑の革命活動への取り組みを示す事実は今のところ見出せない。

ところで、孫文やその革命運動を支援したいいわゆる大陸浪人と九州の華僑の関係については、その大陸浪人の多くが、個人的にもまた組織のうえでも、その出自において、九州といわば深い構造的つながりを持っていたにもかかわらず、今のところ、なんらの接点も見出し得ないと述べるほかない。

九州・長崎は地理的に中国に近い。地理的近さは心理的近さを演出し、心理は、行動に絶えず働きかける。中国社会の成熟の度合いを示すものとしての、学校の設立・運営のされかたや商務総会の設立時期、政治的運動への対処の仕方。これらのことはみな、長崎と中国との「近さ」を明示している。長崎は中国に近く、長崎の華僑は比較的中国本土からの政治的影響を受けやすかったのである。これに対し、中国からは遠く、絶えず新しい思潮が流入し、それ

が渦巻く政治都市東京に近い横浜の華僑は、それ故に現に中国にある政治体制からは比較的
自由で、革新的（決して革命的というわけではなく、その時期その時期の中国の体制とは違った
ものといった程の意味での）思想・行動が採用されやすい環境にあった。さらに言えば、これ
らのいわば「中間」に位置する神戸に居住する華僑は、中国本土より波及する様々な影響から
はもちろん中国本土の政治体制に対するアンチテーゼとして提出される革新思想自体とそれを
支持する活動にも、一定の距離を置き得る立場にあることがしばしばであった、とすることが
出来よう。

略号

外務省記録A－外務省記録『清国ニ於テ日本商品同盟排斥一件』

外務省記録B－外務省記録『清国革命叛乱ノ際ニ於ケル同国人ノ動静態度及与論関係雜纂
（在本邦人ノ部）』

外務省記録C－外務省記録『支那財政関係一件 別冊 革命軍政府財政』

外務省記録D－外務省記録『清国革命動乱ニ関スル地方雜報 長崎県庁之部』

外務省記録E－外務省記録『各国内政関係雜纂 支那ノ部 革命党関係（亡命者ヲ含ム）』

註

- (1) 大野良子『記憶にのこる明治の長崎』宝文館出版、1988年、160～161頁。
- (2) 長崎華僑史については、とりあえず以下の各研究が参考になる。長崎市小学校職員会
『明治維新以後の長崎』長崎市小学校職員会、1925年。内田直作『日本華僑社会の研究』
同文館、1949年。山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、1964年。重藤威夫『長崎居
留地と外国商人』風間書房、1967年。重藤威夫『長崎居留地—一つの日本近代史—』講談
社、1968年。中村質「近世の日本華僑」福岡ユネスコ協会編『外来文化と九州（九州文化
論集2）』平凡社、1973年。長崎県史編集委員会編『長崎県史 近代編』吉川弘文館、19
76年。蒲地典子「明治初期の長崎華僑」『お茶の水史学』20、1976年12月。三村芙美子
「長崎における華僑についての若干の考察」『アジア研究所紀要』4、1977年12月。宮田
安『唐通事家系論攷』長崎文献社、1979年。杉山伸也「グラバー商会—幕末期の長崎貿易
と外商—」「グラバー商会(2)—明治初期における外商の活動—」『年報・近代日本研究』
3・4、1981年11月、1982年10月。山田信夫編『日本華僑と文化摩擦』巖南堂書店、1983
年。小沼新・福宿孝夫「長崎華僑史略年譜」長崎華僑研究会編『長崎華商「泰益號」関係
資料』2、長崎華僑研究会、1986年。黒木国泰「福建会館総簿（丙申年～庚子年）につい
て」長崎華僑研究会編、同前書。市川信愛『華僑社会経済論序説』九州大学出版会、1987
年。中村質『近世長崎貿易史の研究』吉川弘文館、1988年。菱谷武平『長崎外国人居留地
の研究』九州大学出版会、1988年。長田和之「幕末開港期長崎における華僑の流入形態を
めぐって」『洋学史研究』5、1988年4月。佐伯弘次「大陸貿易と外国人の居留」川添昭
二編『よみがえる中世1—東アジアの国際都市博多』平凡社、1988年。許淑真「日本にお
ける福州幫の消長」『撰大学術』B-7、1989年2月。近代日本華僑学術研究会編『近代
日本華僑・華人研究』近代日本華僑学術研究会、1989年。杉山伸也「国際環境と外国貿易」
梅村又次・山本有造編『日本経済史3 開港と維新』岩波書店、1989年。
- (3) 『明治44年長崎県統計書』42～43頁。『明治45年長崎県統計書』40頁。

- (4) 『明治44年福岡県統計書（第1編）』97～99頁。『明治45年福岡県統計書（第1編）』99～101頁。
- (5) 『明治44年熊本県統計書（第1編）』83～84頁。『明治45年熊本県統計書（第1編）』59頁。
- (6) 『明治44年鹿児島県統計書（第1編）』54頁。『明治45年鹿児島県統計書（第1編）』54頁。
- (7) 『明治44年佐賀県統計書（第1編）』47頁。『明治45年佐賀県統計書（第1編）』47頁。
- (8) 『明治44年大分県統計書（第1編）』66～67頁。『明治45年大分県統計書（第1編）』66～67頁。
- (9) 『明治45年大分県統計書（第1編）』66～67頁。
- (10) 『明治45年長崎県統計書』40～41頁。
- (11) 拙稿「明治期九州在留中国人の存在様態」『大分県立芸術短期大学研究紀要』24、1986年12月。
- (12) 同上。
- (13) 『明治45年兵庫県統計書』148頁。
- (14) 『大正元年神奈川県統計書』46頁。
- (15) 同上、49頁。
- (16) 『明治45年兵庫県統計書』148～151頁。
- (17) 馮自由『革命逸史』4、商務印書館、1965年、14～16頁、44頁。
- (18) 同上、15頁。
- (19) 『外国人并支那人名前取調帳』（慶応二年正月ヨリ十二月マデ）長崎奉行所（写、1冊、仮和）。
- (20) 『明治二年己巳從正月至十二月 外国人支那人名前調帳』外務課、居留地取扱（写、1冊、24センチ、仮和）。『外務課事務簿 襍之部 清民人名戸籍簿 明治拾壹年一月以降』長崎県（写、1冊、仮和）。
- (21) 中野理「ボンペと中野雪江」『医家芸術』1968年12月、55頁。鴻山俊雄「在日華僑馮鏡如の足跡をたずねて」『日華月報』64、1972年2月、2頁。
- (22) さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史』くろしお出版、1970年（増補版）。黄福慶『清末留日学生』中央研究院近代史研究所、1975年。李喜所『近代中国的留学生』人民出版社、1987年、117～206頁。
- (23) 『浙江潮』1、光緒29年（1903年）正月
- (24) 『游学訳編』2、光緒28年（1902年）11月
- (25) 菊池貴晴『中国民族運動の基本構造』汲古書院、1974年（増補版）57～106頁。
- (26) 外務省記録A 明治41年3月27日付外相宛長崎県知事報告「高秘第166号辰丸事件ニ関シ在留清国人ニ来電ノ件」。明治41年4月2日付外相宛長崎県知事報告「高秘第181号清国『ボイコット』ノ件」。
- (27) 「日貨排斥ニ関スル雑談」『東亜同文会報告』102、1908年5月、47頁。外務省記録A 明治41年4月23日付「乙秘第327号 日貨排斥ニ関シ在留清国人集会ノ件」。明治41年4月23日付「乙秘第328号 清国人集会ノ件追報」。明治41年5月6日付外相宛長崎県知事報告「高秘第305号 清国『ボイコット』ニ関スル件」。明治41年5月7日付外相宛兵庫

- 県知事報告「兵発秘第156号 清国留学生ノ『ボイコット』反対運動ニ就テ」。
- (28) 長崎税関編『明治四十二年長崎港外国貿易概況』長崎税関、発行年記載なし、139～140頁。
- (29) 外務省記録A 明治41年6月3日付外務次官および農商務次官宛長崎県知事報告「乙水第2263号」。
- (30) 人民銀行総行金融研究所金融歴史研究室編『近代中国的金融市場』中国金融出版社、1989年。
- (31) 外務省記録A 明治41年11月6日付外相宛長崎県知事報告「高秘第791号日貨拒買ニ関スル件」。明治41年11月7日付外相宛長崎県知事報告「神高秘収第774号 清国広東地方ニ於ケル『ボイコット』ノ件」。
- (32) 拙稿「対日ボイコットと在日華僑—第二辰丸事件をめぐる—」『中国近現代史論集』辛亥革命研究会編、汲古書院、1985年。
- (33) 外務省記録B 明治44年11月26日付外相宛長崎県知事報告「高秘収第7418号 清国統一連合会組織ニ関スル件」。
- (34) 外務省記録B 明治44年12月4日付外相宛長崎県知事報告「高秘収第7393号 居留清国人集会ノ件」。
- (35) 外務省記録B 明治44年12月10日付外相宛長崎県知事報告「高秘収第7574号 居留清国人会同ノ件」。
- (36) 『江蘇』7、1903年7月。
- (37) 『日本全国商工人名録』第3版下、1908年。
- (38) 本山豊治『長崎に於ける海産物』長崎商業会議所調査部、1918年、28・29頁。
- (39) 「時報 本邦在留清商」『東京商業会議所月報』4—10、1911年10月。
- (40) 外務省記録B 明治44年12月17日付外相宛長崎県知事報告「高秘収第7671号 清国人会同ニ関スル件」。
- (41) 『長崎新聞』1911年12月17日「華商統一連合会」。前掲『明治維新以後の長崎』645頁によれば、1918年駐日公使章宗祥により「中華民國僑日公民蘇君首生簡表」が書かれ興福寺境内に碑が建立された。碑文には、商務總會会長・時中学校校長であったことや、辛亥革命に際して「多所賛助」であったこと、民国5（1916）年11月に死去したことなどが記されている。
- (42) 拙稿「中華民國僑商統一連合会の成立と性格—辛亥革命に対する在日華僑の—」『中国近現代史の諸問題』田中正美先生退官記念論集刊行会編、国書刊行会、1984年。
- (43) 外務省記録B 明治44年12月12日付外相宛長崎県知事報告「高秘収第7681号 革命決死隊寄港状況ニ関スル件」。
- (44) 外務省記録B 明治44年12月12日付外相宛長崎県知事報告「高秘収第7590号 革命決死隊寄港ノ件」。『東京朝日新聞』1911年12月13日「決死隊に交れる刺客」。『長崎新聞』1911年12月12日「当港より加盟せし決死隊」。
- (45) 前掲『東京朝日』1911年12月13日。
- (46) 『大阪時事新報』1911年12月15日「決死隊に加わる」。外務省記録B 明治44年12月14日付外相宛長崎県知事報告「高秘収第7640号 革命決死隊寄港ノ件」。
- (47) 外務省記録B 明治44年12月9日付外相宛長崎県知事報告「高秘発第7558号 革命決死

- 隊ニ関スル件」。
- (48) 拙稿「辛亥革命時期の在日華僑敢死隊について」『アジア諸民族における社会と文化』岡本敬二先生退官記念論集刊行会編、国書刊行会、1984年。
- (49) 『東洋日の出新聞』1912年1月15日「革命軍の活動写真」。
- (50) 外務省記録C 明治44年12月6日付外相宛長崎県知事報告「高秘収第7516号 居留清国人ノ軍資金募集ニ関スル件」。
- (51) 『大阪朝日新聞』1912年2月2日「孫大統領令息」。
- (52) 『長崎新聞』1912年2月17日「五色の新国旗」。
- (53) 外務省記録D 明治44年2月17日付外相宛長崎県知事報告「高秘収第543号 中華民国人祝賀会ノ件」。
- (54) 『九州日之出新聞』1912年2月13日「対清貿易不振」。『大阪毎日新聞』1912年1月25日「対清貿易の革新」。『東洋日の出新聞』1912年4月2日「支那貿易の一変」。
- (55) 『東洋日の出新聞』1912年3月24日「北清への貨物盛況」。同「北清貿易の曙光」。
- (56) 拙稿「民国成立期の政治情勢と日本華僑」前掲『近代日本華僑・華人研究』
- (57) 外務省記録E 明治31年8月19日付外相宛福岡県知事報告「高秘第584号 亡命清国人ノ挙動報告」などから始まって、大正12年2月13日付内相等宛福岡県知事報告「高秘第3864号 亡命支那人ニ関スル件」などまでの電報等。
- (58) 外務省記録E 明治33年9月4日付外相宛長崎県知事報告「高秘第329号 孫逸仙及同志者来往ノ件」。ただし、この史料では、「外浦町福島屋」となっている。また、これ以前にも、たとえば1906年に福建（幫）会館の招きで、孫文が長崎にやって来たことを示唆する史料の存在も紹介されている。黒木国泰「福建会館総簿（辛丑年～丙午年）について」長崎華僑研究会編『長崎華僑史稿（年報3）』長崎市立博物館、1987年。
- (59) 外務省記録E 明治42年1月16日付外相宛長崎県知事報告「高秘第28号 清国革命党员ノ去来」。
- (60) 外務省記録E 大正2年9月1日付外相宛長崎県知事報告「4594（暗）」。
- (61) 外務省記録E 大正2年9月1日付外相宛長崎県知事報告「高秘特収第1323号 亡命支那人来朝ニ関スル件」。
- (62) 外務省記録E 大正2年9月8日付外相宛長崎県知事報告「高秘特収第1388号 亡命支那人ニ関スル件」。
- (63) 外務省記録E 大正3年3月18日付内相等宛長崎県知事報告「高秘特収第804号 亡命支那人来着ノ件」。
- (64) 外務省記録E 大正5年8月4日付内相等宛長崎県知事報告「高秘特収第3529号 支那革命党员去来ノ件」。
- (65) 深瀉久『四海楼物語』西日本新聞社、1979年。外務省記録E 大正2年10月20日付外相宛長崎県知事報告「高秘特収第1768号 亡命支那人通過ノ件」。
- (66) 外務省記録E 大正3年1月8日付内相等宛福岡県知事報告「高秘第116号 要注意支那人動静ニ関スル件」。
- (67) 外務省記録E 大正2年9月15日付外相宛長崎県知事報告「高秘特収第1312号 亡命支那人到着ノ件」。
- (68) 外務省記録E 大正3年1月12日付外相宛長崎県知事報告「高秘特収第123号 亡命支

- 那人所在不明ニ関スル件」。
- (69) 外務省記録E 大正3年1月21日付内相等宛長崎県知事報告「高秘特発第196号 亡命支那人ノ会合風説ニ関スル件」。
- (70) 外務省記録E 大正3年1月28日付内務省警保局長宛外務省政務局長文書「機密送第13号 支那亡命者名簿送付ノ件」。
- (71) 外務省記録E 大正3年4月25日付内相等宛長崎県知事報告「高秘特発第1226号 支那亡命者現在調ニ関スル件」。
- (72) 外務省記録E 明治42年1月14日付外相宛熊本県知事報告「高秘第32号」。外務省記録E 大正3年1月24日付外相宛鹿児島県知事報告「秘甲第7号 亡命者来往ノ件」。
- (73) 中村義「中国近代史における西郷隆盛像」『東京学芸大学紀要 第3部門社会科学』39、1987年12月。
- (74) 近藤秀樹編「宮崎滔天年譜稿」『宮崎滔天全集』5、宮崎龍介・小野川秀美編、平凡社、693頁には「一月一日 海路、鹿児島着、洗馬町二丁目研屋に投宿、西郷隆盛を展墓」とあり、また、「一月二日 熊本着、前田下学を往訪、荒尾村に帰省」とされているが、前掲外務省記録E 明治42年1月14日付外相宛熊本県知事報告「高秘第32号」によれば、熊本に着き前田下学を訪問したのは1月11日。また、洗馬町2丁目研屋は熊本市に所在する旅館である。したがって、仮に「年譜稿」の筆致に従うとすれば、1月11日 鹿児島より熊本着、洗馬町2丁目研屋に投宿、前田下学を往訪。1月12日荒尾村に帰省、とすべきであろう。
- (75) 前掲、近藤編「宮崎滔天年譜稿」『宮崎滔天全集』5、666・708頁。
- (76) 外務省記録E 大正7年7月19日付内相等宛大分県知事報告「秘第1935号 支那人来往ノ件」。
- (77) 外務省記録E 大正5年9月15日付外相宛福岡県知事報告「高秘第13191号ノ二 蔡鏐一行来福ニ関スル件」。
- (78) 謝本書『蔡鏐伝』天津人民出版社、1983年、150頁。鎌田和宏「史料紹介 蔡鏐と日本」『辛亥革命研究』7、1987年11月。
- (79) 『福岡日日新聞』1913年3月17日「関門に於ける孫氏一行」、「戸畑に於ける孫氏一行」。同1913年3月18日「孫逸仙氏一行」。
- (80) 沢村幸夫「孫文送迎私記」『支那』28-8、1937年8月、157頁。同前、『福岡日日』1913年3月18日。
- (81) 『福岡日日新聞』1913年3月19日「孫逸仙氏一行」。同1913年3月20日「孫氏講演と歓迎」。
- (82) 『福岡日日新聞』1913年3月20日「孫逸仙氏一行」。『九州日日新聞』1913年3月20日「孫逸仙氏一行」。
- (83) 『九州日日新聞』1913年3月21日「孫逸仙氏着熊」、「留学生と孫文氏」、「済済囊に於ける孫氏」、「孫氏特別歓迎会」、「東亜同志会の寄贈」。
- (84) 『長崎日日新聞』1913年3月23日「孫文歓迎彙報」。『九州日日新聞』1913年3月22日「孫氏一行出発」。『東洋日の出新聞』1913年3月23日「滞崎中の孫氏」。『長崎新聞』1913年3月23日「車中の孫文氏」。
- (85) 『九州日の出新聞』1913年3月23日「巨人孫逸仙氏」。『東洋日の出新聞』1913年3月

- 23日「孫氏と鈴木本社長」、「孫氏歓迎会」、同1913年3月24日「医専留學生の孫氏歓迎会」。『長崎新聞』1913年3月23日「滞在中の孫文氏」、前掲『東洋日の出』1913年3月23日「滞在中の孫氏」。
- (86) 『東洋日の出新聞』1913年3月24日「孫氏の帰国」、『長崎新聞』1913年3月24日「昨日の孫逸仙氏」。
- (87) 前掲『九州日日』1913年3月21日「留學生と孫文氏」。
- (88) 前掲『東洋日の出』1913年3月24日「医専留學生の孫氏歓迎会」。
- (89) 『民立報』1912年7月18日「留日長崎専医同学均鑒」。
- (90) 前掲『東洋日の出』1913年3月24日「医専留學生の孫氏歓迎会」。
- (91) 『国父全集』第4冊、中国国民党中央委員会党史委員会、1973年、966頁。
- (92) 前掲『長崎日日』1913年3月23日「孫文歓迎彙報」。
- (93) 前掲、本山『長崎における海産物』28頁。
- (94) 前掲、「本邦在留清商」『東京商業會議所月報』20頁。
- (95) 前掲、本山『長崎における海産物』29頁。
- (96) 長崎華僑研究会編『長崎華商泰益號關係資料』1、長崎華僑研究会、1985年。
- (97) 前掲『長崎新聞』1913年3月23日「滞崎中の孫文氏」。前掲、沢村「孫文送迎私記」は、21日の夜に領事館でおこなわれた晩餐会と、22日に領事の主催のもと福建会館でおこなわれた午餐会を混同し、この演説について、22日の夜「支那領事館」でおこなわれたものとしているが、既に挙げている前後の新聞報道を検討すれば、明らかに誤りである。したがって、この沢村論文を無批判に翻訳した『孫中山全集』第3巻50頁の「在長崎中国領事館華僑晩餐会的演説（一九一三年三月二十二日）」も、その誤りを、そっくりそのまま踏襲する結果となってしまった。この『孫中山全集』所収の演説の標題中にある「三月二十二日」は、「三月二十一日」とされなければならない。尚、同記事も、演説場所を福建会館と誤って伝えている。
- (98) 西島函南「在日華僑に対する孫氏の感言」『支那』4-8、1913年4月。中山大学歴史系孫中山研究室等編『孫中山全集』第3巻、中華書局、1984年、34～50頁。
- (99) 同前、46～49頁。
- (100) 『革命文献』第45輯（中華革命党史料）、1969年、192・202・203頁。
- (101) 『革命文献』第48輯（中華革命党時期函牘）、1969年、67頁。
- (102) 前掲『国父全集』第4冊、155・249頁。
- (103) 中山大学歴史系孫中山研究室等編『孫中山全集』第9巻、中華書局、1986年、207頁。